## 母として、母だから・・・への違和感について考える

8.10　大橋由香子

ひとりの人（女性）が子どもを産んで／育てている現実から「私がこの子を守らなきゃ」「私が母だから」と感じること。あるいは妊娠中の人が不安に感じること。そしてだからこそ原発に反対したり放射能に対処しようと行動するのはわかる。

だけど、それを見ている第三者が（行政が、マスコミが、周囲の人が）「お母さんだから」と括ることへの反発。
背景にあるのは
●わたしは私。それなのに、母、妻という役割やイメージを勝手にあてはめられることへの息苦しさ。
●「母として」の発言・行動なら周囲は認める。だけど、その枠（周囲が思いこんでいる母像）をはみ出すと、とたんに非難する。
　⇒古今東西、母・妻・娘役割から逸脱した女性を「魔女」「鬼婆」として排除・隔離してきた。
●「母性」を賞讃することで、たとえば戦争に邁進する体制に女たちを組み込んできた歴史。
●子どもがいない人はどう感じる？

【放射能の胎児や妊婦への影響について】
「恐怖の象徴」として語るのではなく、でも現実に影響があることに対して、どのように考え、対応していけばいいのか。
⇒堕胎罪が存在し、中絶の許可条件をめぐる長い長い闘いのなかで、
しかも胎児に障害がある場合を許可条件に入れる（胎児条項）と
出生前診断（超音波含む）の「進歩」のなかで。

「私はふつうに赤ちゃんを産めますか」「大人になれるの？」と福島の子どもたちが言っているという現実。
産む・産まないを女が決められない状況が、また強まったのでは？

参考資料：「AERA」2011.8.8 号「放射能と『妊婦の心』」
大橋由香子「難しいことはわからないけど、母は強い？――『産むのが怖い』この時代に」（初出雑誌「インパクション」インパクト出版会 180 号掲載）
　http://wan.or.jp/reading/?p=3964 で読めます